

大うつ病性障害による休職日数は大うつ病エピソードの重症度と関連する

○市村 麻衣、南部 舞香、田中 和秀
ひつじクリニック

[はじめに]大うつ病性障害は生涯有病率16%、年間有病率6.6%のcommon diseaseであり、2020年には世界第2位の健康問題となることが予測されている。大うつ病性障害は労働者の生産性低下および年間休業日数増加、さらには数カ月以上の長期休業につながり、重大な社会的損失が生じる。近年、うつ病傾向の労働者への早期介入により症状改善と労働生産性の向上を得たとの報告もあり、大うつ病性障害の早期かつ適切な診断と治療の重要性が着目されている。今回我々は、精神科クリニック通院中の正規従業員における大うつ病性障害による休職日数と大うつ病エピソードの重症度の関連性について調査した。[対象・方法]当院は地方都市に立地する精神科クリニックであり、精神科医かつ産業医である2名の常勤医が外来診療を行っている。調査対象は当院を平成19年3月から9月の間に初診し、大うつ病性障害の診断を受け休職した42名（男性28名、女性14名、平均年齢 36.8 ± 9.6 歳）とし、その休職から職場復帰までの日数を調査した。対象例は正規従業員であり、当院での治療経過中に休職した同一企業に復職し、復職後も通院加療を続けている。大うつ病性障害の診断はDSM-IV-TR（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition Text Revision）に基づいて行い、大うつ病性障害の重症度およびエピソード回数と平均休職日数について解析した。[結果]大うつ病性障害単一エピソード、軽症3名・中等症19名・重症4名。大うつ病性障害、反復性、軽症5名・中等症9名・重症2名であった。大うつ病性障害の診断および重症度別の平均休職期間は以下の通りであった。大うつ病性障害、単一エピソード 軽症 30.3 ± 6.7 日、中等症 63.1 ± 56.4 日、重症 90.8 ± 39.1 日。大うつ病性障害、反復性 軽症 33.2 ± 33.3 日、中等症 63.0 ± 51.2 日、重症 129.5 ± 96.9 日。大うつ病エピソードの軽症群22名と重症群42名の間で有意差を認めた。エピソード回数と重症度によって分類した群では、重症度が高いほど休職日数が多い傾向が見られたが、対象例数が少ないため統計学的有意差は見られなかった。[考察]本調査により、大うつ病性障害による休職

日数と大うつ病エピソードの重症度が関連することが示された。精神疾患においても他の疾患と同様に早期発見および早期治療によって休職期間を短縮することができる可能性が示唆される。